

転生したら時の王者だった件。

ドラゴニック・オーバーロード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の高校生、「東 刻雄」（あづま ときお）18歳。

仮面ライダーファンでジオウの最終回を見終わった彼はその翌日、不審者に銃で撃たれそうになった子供を助けて死んでしまった。

気がついたら仮面ライダージオウの力を持って異世界に転生していた彼はスライムのリムルやその仲間たちと出会い、異世界での新しい生活を送ることになる。

しかし、この時彼は知らなかった。自分がいずれ世界を支配し、絶望の未来を作り出す最低最悪の魔王になる未来が待っていることを。

その事実を知った彼は、その未来を変えるべく、最高最善の魔王になることを決意し、自らが目指す王になるために戦うことを決意する。

これは新たな逢魔降臨歴に記される、新たなる王の誕生の物語。

ジオウが出てくる転スラのssを見て、書いてみたくなりました。

主人公の絵を描きました。

目次

プロローグ	1
1話 仮面ライダージオウ、生誕。	4
2話 リムルとの出会い	12
3話 いぎ、ドワルゴンへ	17
4話 事情聴取と鍛冶職人	25

プロローグ

「いやあー、仮面ライダージオウ、面白かったなあ！」

何気ない、平凡な人生。

そんな人生を送っていた俺「東^{あづま} 刻雄^{ときお}」18歳の楽しみは毎週日曜日の特撮番組「仮面ライダー」だ。

そしてたった今、平成最後の仮面ライダー「仮面ライダージオウ」の最終回を見終わったところだった。

「ふう、にしてもソウゴかつこよかったなあ。ソウゴの最後の決断とかめちやくちや感動したし。あんな立派な王様、俺なんかじゃ絶対になれないだろうなあ。」

俺はジオウの最終回を見終わったので、すぐご機嫌だった。最終回のシーンをひとつひとつ思い出しながら、ベッドの上で余韻に浸っていた。

翌日：

終盤に差し掛かった高校生活最後の夏休み。残り少ない大切な夏休みをどう過ごそうか考えながら、公園を歩いていた。

「ふう、さくて、もうあと数日しかない夏休み、どう過ごそうかなあ？」
そんなときだった。

パアンパアン！

「っー」

いきなり大きな発砲音が聞こえた。

音がした方を見ると、拳銃を持った男がいた。

「おおい！誰か薬を寄越しやがれえ！撃つぞお！」

何やら薬がどうのこうの叫んでいる。とにかくヤバいやつだとは分かった。

俺はどうしようかと周りを見渡す。すると一人の女の子に目が止まった。女の子は咄嗟のことで動けなくなっている。

そんなときだった。

男がまた叫び出して、今度は拳銃をその女の子に向けた。ベンチに座っていたその子の母親らしき人物は急いで飛び出したが、この距離じゃ間に合わない！

誰もがダメだと思った。だが…

パアン！

「うっ！」

俺は何故か咄嗟に女の子のもとに駆け出していた。女の子を突き飛ばし、その瞬間に胸のところに弾が当たる。

血が出ている。今まで感じたことのない痛みが走る。

(え？何だこれ？熱い…熱いよお…！)

『確認しました。耐熱耐性を獲得。成功しました。』

(あんな異常者に殺されるとか…マジ…無いわ…！)

『確認しました。エクストラスキル「状態異常無効」じょうたいいじょうむこうを獲得。成功しました。』

(痛い…痛いよお…！少しは和らいでくれ…！)

『確認しました。痛覚軽減を獲得。付属して、ダメージ軽減を獲得。成功しました。』

(何だ？さつきから騒がしいな…？…人が大変だつてときに…)

「おい！君！大丈夫か!?今、救急車呼んだからな！頑張れ！」

(夏だつてのに…何だか…寒くなってきやがった…。)

『確認しました。耐寒耐性を獲得。成功しました。耐熱耐性、耐寒耐性を獲得したことにより、エクストラスキル「熱変動耐性」にスキルが変化しました。』

(俺、死ぬのか？…そういえば…あの女の子は…?)

俺は周りを見る。そうすると、すぐ近くで女の子が俺を見て泣いている。

(そうか。あの子は無事だったか…。よかった…、守れて…。)

『確認しました。ユニークスキル「守護者」守ル者を獲得。成功しました。』

頭に声が響く中、俺は走馬灯のように色んな記憶が頭の中を巡った。

（ああ、死ぬのか、俺。…まあでも、仮面ライダージオウの最終回見れたし、いいかな？）

『確認しました。ユニークスキル「時之王者」（ジョウオウ）を獲得。成功しました。続いて、ユニークスキル「逢魔之日」（オーマノヒ）を獲得。成功しました。』

（ライドウオツチの継承の時に出てくる前作の平成ライダーに出てきた人がまた出てきてくれてうれしかったなあ。そういえば自分でライドウオツチの色を塗ったりして、改造もしたなあ。）

『確認しました。ユニークスキル「戦士之記憶」（ライドウオツチ）を獲得。成功しました。続いて、ユニークスキル「改造者」（作り変エル者）を獲得。成功しました。』

（ソウゴは映画でもめっちゃくちやカツコよかったし、オーマフォームも活躍すごかったし、変身とかも真似したりしたなあ。あれこそまさに最高最善の魔王だよな。）

『確認しました。ユニークスキル「王者之資格」（王ニナリ得ル者）を獲得。成功しました。続いて、ユニークスキル「模倣者」（真似ル者）を獲得。成功しました。』

（ウオズみたいな従者やゲイツやツクヨミたちとのやりとりも面白かったし、みんな強かったよなあ。）

『確認しました。ユニークスキル「従者」（付き従ウ者）を獲得。成功しました。』

（時の王者の活躍を見れただけでも…とても楽しかった。生まれ変わったら、ソウゴみたいな強い人になりたいなあ。）

『確認しました。時間に関する種族の肉体を生成します。成功しました。続いて、ユニークスキル「強キ者」を獲得。成功しました。』

あ、ヤバい。意識が…

あゝあ、短い人生だったけど…楽しかったなあ。生まれ変わっても、悔いのない人生を生きたいなあ。

目の前が…暗く…

そして俺、「東刻雄」（あづまときお）は18年という短い人生に幕を閉じたのであった。

1話 仮面ライダージオウ、生誕。

「ん、ううくん…」

拳銃に撃たれて俺は死んだ、はずだった。なのに何故か体が動く。目を開けると、そこは森のような場所だった。

「此処は一体？俺は確か死んだはずじゃ…」

体を触ってみたが、怪我也何もなかった。確かに胸を撃たれたはずなのだが…

「うくん、特に怪我也何も無いなあ。…あれ？そういえば俺って、こんな華奢な体してたっけ？何か細いし…」

自分の腕や胴体を見てみると、何やらとても細かった。俺はそこまですみみキというわけではなかったが、男らしい胸筋や太い腕はあつたはず。それがなぜか細くなっている。まるで女みたいな。それに服もこんな白い服を着ていた覚えはない。

あつ、ちようど湖がある。これで自分の姿を見てみよう。

「どれどれ…」

湖を見るとそこには、白いメッシュが入った長い光るような金髪とマゼンタの瞳をした、美少女がいた。

「なっ!?おい、君!?!そこで何をやってるんだ!?!俺に掴まれ!!」

俺は急いで、その子に手を伸ばした!

だが、掴むのはその子の手ではなく、水だけだった。

まさかと思い、俺は自分の顔を触ると、彼女も顔を触る。

色んなポーズを取ったりもした、そしたら向こうも全く同じ行動をする。

まさか、まさかとは思うが!

「俺、転生しちゃったー!?!」

そこから俺は色々と考えた。

そこでさつきまでの記憶を辿る。まず俺は夏休み終盤、夏休みをど

う過ごそうかと考えてぶらぶらしていた。そしてたら頭のおかしい男が女の子に銃を向けたから、女の子を庇って撃たれて死んだ。

うん、ここまでは覚えてる。

次は現状の把握だ。まずここは間違いなく病院ではないだろう。というか、こんな森の建物もない病院などテレビでも見たことがない。どうして此処にいるかは分からない。誰かに運ばれたにしても、森に運ぶ意図が分からない。

そして、この姿。俺の容姿はそこまでイケメンというわけではなかった。：何か自分で言つて悲しくなってきた。だが、こんな華奢な体ではなかった。腕だつてもう少し太かったし、身体の線だつてこんなに細くなかった。そしてこの顔。俺はこんな美少女顔では断じてなかった。ほんとどこにでもいるような顔、ザ・普通な顔だった。金髪でもなかったし、こんなに長い髪でもなかった。ちなみに性別だが、ちゃんとムスコはあった。つまり男だった。よかった。

結論。俺は銃で撃たれて死んで、転生したのだ！

そうだ。それだ。それしか考えられない。死んで、病院でもない場所において、別の容姿になつてるといふこの状況を踏まえれば、転生としか考えられない。

というか、そもそもどうして俺はこんなことになつてるんだ？此処はどこなんだ？

「うっ!!」

そのとき、俺の頭に激痛が走った。とてつもない量の情報が頭の中に入ってくるのが分かる。

「あっ…い…ああああ!!頭が…頭が割れる!!」

頭の中に浮かんでくるのは俺が昨日見終わった仮面ライダージオウの姿。ジクウドライバー、ライドウォッチ、歴代の平成ライダーなどの情報が頭に流れくる。

「ああああああー!!」

1分後…

痛みが来るのは突然だったが、痛みが終わるのも突然だった。いつの間にか痛みはおさまっていた。

だがそのおかげで自分の今の状態が分かった。頭に入ってきた情報を改めて整理する。

分かったのは俺が持つ能力、スキルの使い方、そして俺の状態。

ユニークスキル「時之王者」。

仮面ライダージオウに変身できるスキル。「ジクウドライバー」を出現させ、それを使って俺の肉体を仮面ライダージオウに変える。鎧を着るような感じではなく、クウガとかのような肉体変化型のように。あらゆるライドウオツチの能力を使用できる、能力の応用もできる。俺の頭に情報を流し込んできたのは、このスキルだったようだ。

ユニークスキル「戦士之記憶」。

仮面ライダージオウの重要アイテム「ライドウオツチ」を生産できるスキル。だが一部、条件が揃わなければ作れないライドウオツチも存在する。

ユニークスキル「王之資格」。

魔王への覚醒を促すスキル。これはまだよく分かんない。

ユニークスキル「逢魔之日」。

オーマジオウの力を封印した結果にできたスキル。オーマジオウのオーラや力を少しだけ使うことができる。そして、激しい思いに呼応しオーマジオウへ覚醒するためのスキル。

ユニークスキル「守護者」。

魂の系譜で繋がった俺の配下たちのステータスの常時アップ、ダメージ回復が可能。

ユニークスキル「模倣者」。

一度見た技や動き、スキルを模倣できるスキル。

ユニークスキル「改造者」。

スキルやあいてむの進化や統合ができるスキル。

ユニークスキル「従者」。

俺のサポートをしてくれる自立型のスキル。解析・鑑定などをしてくれる。

ユニークスキル「強キ者」。

戦闘を続けるほどに、ステータスが上昇していくスキル。

とまあ、これが俺の主なスキルだ。

なるほど、要するに俺は仮面ライダージオウに変身できるということかとか。しかもライドウォッチまで…。

仮面ライダーに変身できるのはライダーファンとしては嬉しいが、俺に扱いこなせるのだろうか。不安だなあ。

「仕方ない。とりあえず進むか。」

とりあえず俺は進むことにした。

そこから俺はこの森を出るために歩いた。だがやはり、中々出口が見つからない。だが、だからといってこのままというわけにもいかない。

とにかく頑張つて、進んだ。

しばらくして…

「うわああああ!!」

俺は巨大な虎に追われていた。

くそっ! どうしてこんなことに! 草むらから物音がしたから、それを木の枝でつづいたら虎が出てきて!

「うわっ!」

俺はこけてしまった。そして目の前にはさっきの虎が。

くそ! せっかく転生したのに! 俺の人生、ここまでか!

「ガルルル…」

「ひい…」ブルブル

「ガオオオ!」

「く…来るなあ!!」

「ガウツ!」

俺からいきなり発せられた黄金のオーラに当てられ、虎は吹っ飛ばされた。

「えっ!? 今のは一体!」

「ガルルル…」

やばい! さっきの虎が立とうとしてる!

(どうする!?このままじゃ…いや、待てよ?そういえば俺、変身できるじゃん!!)

そうだ!変身して戦えばいいんだ!とにかく、このままじゃやられる!

戦えるのなら、戦うしかない!

頼む!出てくれ!ジクウドライダー!!

『ジクウドライダー!』

そう念じると腰にジクウドライダーが出てきた。そして手にはジクウドライダーのスイッチが…

「よしっ!やってやる!」

ライダーのスイッチを押す。

ポチッ『ジオウ!』

ジクウドライダーにスイッチをセットする。待機音が鳴る。そしてソウゴのように構える。

「変身!!」

ジクウドライダーを360°回転させる。時計のような音が鳴る。

『ライダータイム!カメーンライダー!ジオウ!』

俺の体が仮面ライダージオウに変化していく。ライダーの文字が顔に装着される。

虎が起き上がった!俺はジカングレードを出す。

虎が突進してきた!俺は飛び上がった。するととてつもないジャンプ力が出た。すごい!虎から追いかけてたときも思ったけど、俺身体能力がもの凄いがってる!

俺は虎にジカングレードで攻撃する。流石に効いてるみたいだ。虎が爪で攻撃してくるが、ジカングレードで受け止め、弾く。

『ジクウ!』

銃に切り替えて、虎に攻撃する。そしたら虎は猛スピードで突っ込んできた!ここは回避だ!!攻撃をかわす。

「あのスピードは厄介だな。でも俺にはあれを避けられるほどの反射能力はない。なら、これだ!」

ポチッ『カブト!』

カブトライドウオッチをドライバーにセットする。そして回転！

『アーマーターイム!!チェンジビートル!カブトー!』

ジオウの肉体にカブトのアーマーが装着される。

「クロックアップ!」

『クロックアップ』

俺はクロックアップしたスピードで、虎に猛攻撃を仕掛ける。このスピードには虎もついていけず、ただただ攻撃を喰らい続けることになる。

『クロックオーバー』

クロックアップが終わった。

虎はボロボロだ。今のうちにトドメだ!

ドライバーからジオウライドウオッチを取り外し、剣に切り替えたジカンギレードにウオッチをセットする。

『フィニッシュターイム!』

虎に向かって走る!

『ジオウ!ギリギリスラッシーユ!』

虎を居合切りする。虎は爆散する。

「よっしゃあ!!」

勝ったぞ!初めての戦闘に勝ったぞ!やったあ!

そんなふう喜んでいと、

「何すか、今の!？」

「えっ?」

緑色の体をした少年が現れた。

「今のすっごいカッコよかったす!どうやったんすか!?それに何すか、その鎧みたいなの!」

「えくと、君は?」

「オイラ、ゴブタっていうす!よろしくっす!」

「ゴブタ君か。よろしく。」

俺は変身を解く。するとゴブタが驚く。

「あ…あんだ女だったんすか!？」

「いや。こんな身なりだけど俺は男だよ?」

「えっ!?男だったんすか!?すまないっす。」

「いいよ。女っぽい見た目なのは自覚してるし…」

「やっぱり他の人から見たら俺って女に見えるんだな。」

「えーと、ゴブタ君は人間…じゃないよね?」

「そうっす。オイラはゴ布林っす!」

「ゴ布林!?!」

「えっ!?そうっすけど、何で驚いてるっすか?」

「あー、ごめんごめん。ゴ布林見るの初めてだったからさ。」

「そうだったんすか。」

ゴ布林って、ゲームとかでしか見たことないけど本物を見たのは初めてだな。

「そういうあんたも魔物っすよね。」

「え?俺って魔物なの?」

「そうっすよ?分かんなかったんすか?」

へえー、俺って人間じゃなかったんだ。まさか魔物になってるなんて。

「あんた名前は?」

「名前?あー(名前か。どうしよう。この世界では名前ないし…うーん…ソウゴ、ソウゴ、そうご、そうが、そうが、ソウガ、そうだ!)俺はソーガだ。」

俺はソーガと名乗ることにした。

「ソーガっすね。誰に付けてもらったんすか?」

「え?いや、自分で名乗ってるだけだよ。」

「あ、そうだったんすか。オイラたちはリムル様に付けてもらったんすよ。」

「リムル様?誰?」

「オイラたちの主人のスライムっす!」

「え?スライムが主人なの?」

「うん。スライムだけどめちやくちや強いんすよ!」

スライムがゴ布林の主人か。スライムといえばゲームとかでは雑魚モンスターだが、そんなに強いスライムがいるのか?

「よかったら村に来るっすか？」

「え？いいの？」

「うん！あんたは悪い人ではなさそうだったので！どうっすか！」

（うーん、このまま一人でいるのも危険だし…よし！ここはお言葉に甘えて…）

「わかった！じゃあ、お邪魔させてもらうよ！」

「そうっすか！よかったっす！じゃあ早速案内するっすよ！それとゴブタ君はやめてくださいっす。ゴブタでいいっすよ！」

「分かったよ、ゴブタ。」

こうして俺は死んで、転生して、変身して、戦って、ゴブリンと出会って、ゴブリンの村に案内されることになったのだ。

そして、この先に待っている出会いが俺の運命を大きく変えることになるとは、俺はまだ知らなかった。

2話 リムルとの出会い

ゴブタに村まで案内をしてもらった。そこにはゴブリンと狼が住んでいた。

「ねえ、ゴブタ。この狼たちも魔物なの？」

「そうっすよ。牙狼族がろうぞくっというっす！」

ゴブタの話によると、つい最近までゴブリンと牙狼族は戦っていたそうなのだが、そのスライムのリムルが牙狼族の長を倒したおかげで戦いが終わり、今はゴブリンと牙狼族は仲良くできてるそうだ。

そんなにすごい人なのか、リムルってスライム。

「此処にリムル様がいるっすよ。リムル様ー！お客さんを連れてきたっすよ！」

「お客さん？まあいいや。通してくれ。」

ゴブタが家の中に声をかけると、中から声が聞こえる。

「さあ、入るっすよ。」

「うん。お邪魔します。」

俺が中に入るとそこには一匹のスライムがふんぞり返っていた。

「やあ、よく来たね。俺はスライムの「リムルⅡテンペスト」だ。よろしく。君は？」

「俺はソーガと言います。」

「名持ちだったのか。誰につけてもらったんだ？」

「いえ、誰かに付けて貰ったんじゃないやなくて、俺が勝手にそう名乗ってるだけです。」

「え？じゃあ本当は名無しってこと？」

「まあ、そうですね。」

「ふうん。どこから来たの？」

「えくと、日本っていうところから…。」

今思ったが、この世界の人たちに日本ってという言葉は通じるのかな？ていうか日本って知ってるのかな？

俺がそう考えながらリムルさんを見るとリムルさんは驚いていた。

「ゴブタ、ちよっと外に出てって貰っていいかな？彼と二人で話した

「いんだ。」

「え？わかったつす。じゃあ、ゆっくりしてくつすよ。」

「うん。ありがとね。」

「別にいいつすよ。それじゃ。」

そう言つてゴブタは出て行く。改めてリムルさんのほうを向く。

「あのく、二人で話したいつていうのは？」

「君、日本から来たの？」

「え？あ、はい。そうですけど…」

「もしかして君、転生者？」

「っ！」

な…なんでそのことを!?ていうか日本を知ってるのか？

「そうですけど、何でそのことを…」

「実はね…俺もなんだよ！」

「え？」

「俺も日本から来て、スライムに転生しちやつたの！」

「え…ええええええええ!!」

「いやあ、まさか俺の他にも転生してきた日本人がいたなんて。しかもこんなに早く会えるなんて！」

「俺も驚きましたよ！まさかリムルさんも転生者だったなんて！」

そこから俺たちはお互い自己紹介した。

リムルⅡテンペスト。前世の名前は「みかみさとる三上悟」。前世ではゼネコン企業に勤めていたサラリーマンだったらしく、通り魔に刺されて死んで、気付いたらスライムに転生していたらしい。

「そつか。君は拳銃で撃たれて死んだのか。」

「はい。いやあ、もう痛いなのつて、最悪でしたよ。」

「だよなあ。俺も刺されたとき、めちやくちや痛かったよ。」

「そうだ。そういや君、名前ないんだろ？なら、俺が付けてやるよ。」

「いいんですか？」

「ああ、これも何かの縁だしな。よくし、確かソーガって名乗ってたよな？じゃあ、君はそのまま「ソーガ」だ！」

「ソウマ！ありがとうございます！」

「いいって！別…に…」

ドサツ

「え!?!ちよつとリムルさん!?!大丈夫ですか!?!」

リムルさんが急に倒れた！何が起こったんだ!?!

『解。我が王に名付けを行ったことにより、一気に大量の魔素を持つてかれたのだと思います。』

「え!?!何!?!だれ!?!」

いきなり頭の中から声が響いた。

『解。ユニークスキル「付キ従ウ者従者」の効果です。これから我が王のサポートをしていきます。』

(あつ！君が付キ従ウ者従者か!?!そういうえば自立型って言ってたし、自分から話しかけてくることもあるのか…。えくと、とりあえずどうしてリムルさんが倒れたのか分かる?)

『解。個体名：リムルⅡテンペストは我が王に名前を付けたために魔素を消費したのです。』

(えつ！名前を付けただけで!?!ていうか魔素って?)

『魔物にとって、生命の源となる物質です。』

(へえー、そんな大事なものなんだ。俺も魔物になったし、俺にとって必要不可欠なものなんだな。ていうか名付けで魔素がなくなるって?)

『上位の魔物に名付けをすると、それ相応の魔素を吸収されます。個体名：リムルⅡテンペストは我が王に名付けをしたことで我が王に大量の魔素を失ったのです。』

要するに俺のせいってこと?それは悪いことしたなあ。なんとかしなきゃ!

(何とかできない?)

『解。我が王が個体名：リムルⅡテンペストに魔素を分け与えれば、復活します。』

(本当に!?!なら早速…)

『ただし、実行すれば今度は我が王が魔素切れでスリープモードになります。』

(そうか、今度は俺が…。なら、どうすれば…)

『解。ユニークスキル「戦士之記憶」ライドウオッチでインフィニティスタイルのライドウオッチを制作し、使用すれば大量の魔素が手に入るので、分け与えても魔素切れは起こりません。』

(そうか!なら早速…)

俺は自分の手にインフィニティスタイルのライドウオッチを出現させる。

ポチツ 『インフィニティスタイル!』

おお、体に力が湧き上がってくる!よし!じゃあやるか!

俺は早速リムルさんに魔素を分け与える。しばらくすると、リムルさんが起きた。俺の体はなんともない。

「ん〜ん?あれ?俺はいつたい?」

「あつ!リムルさん、起きたんですね!よかったです!」

「ん?お前はソーガだよな?何か名付けしたら、途端に眠くなって…」

「あく、実は…」

俺はリムルさんに事情を話す。リムルさんは少し驚いていたが、納得してくれたようだ。

「なるほどなあ。しかしたった一人にこんなに魔素を持ってかれたのは初めてだな。君、結構素質あるよ。」

「え?そうでしょうか?」

「うん、しかもかなりの…」

何かそう言われるとちよつと照れるなあ。

「そういえば、君はこれからどうするの?」

「え?どうするって?」

「いやだから、家とか住むところはあるのって?」

「あく、ないですね。困ったなあ。どうしよう…」

野宿するしかないのか?いや、でもろくに食べ物もないし、野宿のための道具とかもないし、どうしたものか…。

「…よかったら、ここで暮らさない?」

「え? いいんですか?」

「ああ、同郷の人を、しかもまだ18歳の子を放っておくわけにはいかないからな。大人として当然さ。」

「リムルさん…ありがとうございます!」

「ああ、どういたしまして。これからよろしくな! ソーガ!」

「はい! よろしくお願いします! リムルさん!」

こうして俺はリムルさんたちの村で暮らすことになった。まさか転生してすぐに俺と同じ転生者の日本人に会えるとは思わなかった。

何気ない、平凡な人生…ではもうない。

転生して、仮面ライダーに変身して、スライムと出会って、ここから俺の新しい人生が始まる。

これが後に時の王者と呼ばれる男の始まりの物語だった。

3話 いざ、ドワルゴンへ

俺がこの村にやってきて少し経ったころ、俺たちは困難に直面していた。それは…

「うくん…これは家とは言えないなあ。」

「ですねえ…。」

「うっ！」

そう、俺たちの困難、それは家の建築だ。

この村は衣食住を整えるために食料調達チーム、衣類調達及び建物の建築チームに分かれて、みんな活動している。

だが、その中でも家の建築はあまり上手く行っていないのだ。そして衣服の調達も。

そもそも技術を持っている者がいないのだ。そのため家の建築や、衣服の作り方も分かってない者たちがほとんどのため、なかなか衣と住は思ってるほど上手くいかない。

衣服もとても服とは言えないものばかり。特に女性のゴブリンのゴブリナだっけ？この子たちの服はその…ろ…露出がは…激しい／＼。別に嫌いと言うわけではないが…／＼。

そして、ゴ布林たちが作った家は当然崩れた。

「まあこうなるよなあ。」

「当然ですね。」

「お恥ずかしい話です…。」

「すみません…。」

衣服のほうもリムルさんが女性ゴブリンの服を見て、興奮している。やはりスライムといっても、中身は男なんだなあ。

「技術を持った人がいないなら、調達は出来ないの？」

「今まで何度か取引をしたことがある者たちがおります。衣服の調達もですが、手先の器用な者たちなので、家の作り方も存じているかも…。」

そっか。なら、会ってみるしかないか。

「じゃあその人たちに会いに行ってみるのかなさそうだね。リムルさ

んはどうしますか?」

「そうだな。今はそれしかないな。どこの誰なんだ?」

「ドワルゴンに住むドワーフ族です。」

「ドワーフ?!」

ゲームとかにも出てくる鍛冶の達人の?!流石はファンタジーな異世界!会ってみたいなあ。

「そのドワルゴンとやらに行ってみる。リグルド、留守の間、村を頼めるか?」

「はっ!お任せあれ!」

「ソーガも来るか?」

「え?良いんですか?!」

「ああ、お前強いし、居てくれたら頼りなるんだよ。どうかかな?」

リムルさんが俺を頼ってくれてる。素直に嬉しいし、俺もドワーフに会ってみたいし…。

「分かりました!俺でよければ、ぜひ!」

「よし!決まりだな。」

そして俺はリムルさん、そしてリグルドの息子であるリグルとゴブタと他2名のゴブリン、牙狼族たちと一緒にドワルゴンへ行くことになった。俺はジオウのバイク「ライドストライカー」に乗ることにした。運転の仕方は何故か自然と分かる。

「それじゃ、行ってきまーす!」

『行ってらっしゃーい!』

リムルさんとゴブリンたちは牙狼族たちに乗って、俺はライドストライカーを走らせた。

俺たちは川に沿って北上を続けていた。

進化した牙狼族のスピードは凄まじく、俺は追いつくために更にライドストライカーを加速させる。

一旦、途中の河原で休憩することにした。

「リグル君、君のお兄さんは誰に名前を付けてもらったの?」

「はっ！兄は通りすがりの魔族のゲルミュツド様に付けてもらったそうです。見どころがあるからと…。」

「ゲル…。」

「ゲルミュツド。魔王軍の幹部です。」

魔王…。この世界にはそんなものまでいるのか。魔王つていやあ、ジオウも同じだな。

「なあ、ソーガ。」

「ん？どうしました？」

「ちよつと聞きたいことがあるんだが、というか別に敬語じゃなくていいぞ。この世界ではお互い生まれたばかりなんだし。」

「え？いいんですか？」

「ああ。」

「…分かったよ、リムル。これでいい？」

「ああ、そんな感じだ。」

「それで聞きたいことって？」

「お前のスキルについてなんだが…。」

「スキル？」

「お前に名前を付けたとき、お前のスキルを知ることができたんだが、よく分からないものが多くてさ…、詳しい内容を見ようにも何かに妨害されて見れないんだよ。」

ふむ、仮面ライダージオウのことか。

「分かった。話せることは話すよ。」

そうして俺は話した。人々の笑顔を守るため、世界を救うために戦った20人の戦士たち、「平成仮面ライダー」について…。

「とまあ、これが大まかな19人の平成ライダーの説明かな？」

「なるほどな。それで最後の一人は？」

「最後の20人目の仮面ライダーが、俺が変身する「仮面ライダージオウ」さ。まあ、正式な変身者は「常盤ソウゴ」さんなんだけどね。」

「へえ。どんな仮面ライダーなんだ？」

「仮面ライダージオウは今まで言った19人の仮面ライダーたちの力を継承し、その力を使うことができるんだ。」

「マジか?!そいつはすげーな…。」

「と言つても、アーマーを装着してるときに一時的に使えるだけなんだけどね。」

「ふうん。」

「まあでも、グランドジオウは違うけどね。」

「グランドジオウ?何だそれ?」

「ジオウの最終フォームだよ。グランドジオウは今まで言った平成ライダーをフォーム問わずに召喚したり、そのライダーの武器を召喚して使うことができるんだ!」

「はあ?!何だよそれ?!強すぎだろ!!」

「でしょ!でもそんな力があつても、敵がそれに合わせて強くなつちやつたから、あまり活躍できなかったと言われてたりするよ。まあ、それでも相手をフルボッコにできるくらいの力はあるんだけどね。」

「そつか。すごいな、ジオウつて。」

でもそんな力を軽く超えてしまうフォームがあるんだよなあ。

「確かにこれだけでも十分強いんだけど、実は更に強力なフォームがあるんだよ。」

「まだ上があんのかよ。」

「うん。その名も「オーマジオウ」。」

「オーマジオウ?」

「いやー、俺が知る限りじゃあれほど強い仮面ライダーはいなかったな。」

「オーマジオウは常盤ソウゴさんの未来の姿であり、最強の魔王、真の時の王者なんだ。オーマジオウは今まで言った平成ライダー全員の力を使つたり、召喚したりするだけじゃなく、それ以外の能力も凄すぎて、あのグランドジオウでも勝てなかったんだよ。」

「グランドジオウでも?!そりやまたとんでもないなあ…。」

「でしょ。まさに理不尽の権化とも言えるくらい強いんだよ。」

「はあ、すごいなあ。仮面ライダーっていうのは…。」

リムルは物凄く驚いてくれたみたいだ。

そして一通り話し終わったので、みんなそれぞれ休むことにした。

おっと、そうだ。

「ねえ、付キ従ウ者従者。」

『何でしょうか？マイロード我が王』

「俺って魔物なわけでしょ。何の魔物なの？ゴブリンでもスライムでもないだろうし。」

『解。マイロード我が王の種族は「こくまぞく刻魔族」です。』

「こくまぞく？何それ？」

『時間に関する保有スキルを持つ魔物であり、現在世界でマイロード我が王ただ一人しかいません。』

「え？俺一人しかないの？」

『はい。マイロード我が王はユニークモンスターですから。』

「ユニークモンスター？よく分からないけど、要するに凄く珍しい魔物ってこと？』

『はい。』

「へえ〜。」

刻魔族か。う〜ん…、今考えても仕方ないか。とりあえず今は寝よう。

そこから俺たちはまた移動した。ドワーフの国まではゴブリンの足では歩くと2ヶ月はかかるのだとか。その距離を嵐牙たちのおかげで3日で走破することができたのだった。

俺たちが向かっている国は「武装国家ドワルゴン」。天然の大洞窟を改造した美しい都であり、ドワーフだけでなく、エルフや人間も沢山いるのだとか。

ていうかエルフもいるんだな。リムルは何やら邪なことを考えているようだったが。

そしてドワーフ王のガゼルⅡドワルゴは「英雄王」と呼ばれる人物であり、国民にもとても慕われているという。いい王様なんだな。

またドワルゴンは中立の自由貿易都市のため、その地での争いは王によって禁止されているらしい。そのため、俺たちのような魔物が入っても大丈夫なんだとか。それを可能としているのがドワルゴンの強大な軍事力。この千年、ドワーフ軍は不敗を誇っているのだという。

そんなに強い国の王様には誰も逆らわないだろうな。

そしてドワルゴンにようやく着いた。ここから先は俺、リムル、ゴブタで行くことになった。

「本当に3人だけで大丈夫ですか？」

「ああ、あまり大勢で行って目立たないほうがいいだろう。ゴブタは案内役、ソーガは護衛に連れて行く。」

「しかし…」

みんなリムルたちが心配なんだな。

「大丈夫だよ。いざとなったら、俺が戦うから。」

「そういうことだ。じゃあ、行ってくるからな。ここで待ってるよ。」

俺たちは早速ドワルゴンへの入国審査を受けるため、行列に並ぶ。

「結構並んでるなあ。」

「どれくらいかかるんだろ？」

そうして大人しく並んでいると、

「おい！魔物がこんなところに並んでるぜ！」

「まだ中じゃねえし、ここなら殺してもいいんじゃない？」

早速絡まれたな。面倒くさいなあ。

「おい。荷物置いてけよ。それで見逃してやるよ。」

普通に柄の悪い不良にしか見えない。

「ゴブタ君、俺が言ったルールの1つ目は覚えてるかな？」

「はいっす。ルールその3、「人間は襲わない」！」

なんでもリムルが村でルールを作ったらしい。ルールは3つ

1つ…仲間内で争わない

2つ…他種族を見下さない

3つ…人間は襲わない
というものだ。

まあ、これくらいはあったほうがいいだろう。

「うむ、では少し目を瞑り、耳を塞いでおくんだ。」

「はいっす。」

どうやらリムルがやるようだ。

(ねえ、付キ従ウ者 従者。俺ってあいつらに勝てる?)

『解。我が王なら、何の問題もないかと。』

(そっか。なら…)

「ねえリムル。俺に任せてもらってもいい?」

「ん? いいのか?」

「うん。」

そうして俺は前に出る。

「ああん? 何だこのチビ女?」

「何だ? お前が相手してくれんのか?」

「そっだよ。あと俺は男だよ。」

「はっ! こんなチビ女が相手とは俺たちも舐められ…え? 男?」

荒くれの冒険者たちは俺の発言に困惑しているようだ。周りにいる人たちも同じ反応だ。

「ま…まあいい! 男でも女でも関係ねえ! そうか痛い目に合いてえみたいだな。だったら、望みどおりにしてやるよ!」

そういうと冒険者の男が殴りかかってきた。

だが…

ポチツ 『アックスフォーム!』

ガッ!

俺の顔面に拳が当たる。しかし…

「…いつつてえく!!」

逆に冒険者の男のほうが泣きながら痛がっていた。それもそのはず。何故なら…

「どう? 俺の強さに泣いたかい?」

俺が手に持っている「電王アックスフォーム」のライドウオッチの

力だ。殴られる直前、このウォッチで防御力を底上げしたのだ。

半端なく硬くなった俺の体を思いつ切り殴ったのだ。そりや痛いはずだ。

「つつつ！てめえ！何しやがった!!」

「え？何もしてないよ？ただ立ってただけだよ。それより涙が出てるよ。紙をあげようか？涙を拭えるし、鼻水も拭けるよ。」

俺はそう言つて挑発すると、相手は顔を真っ赤にして激怒した。

「このクソガキ!!もう容赦しねえ!!てめえら!!こいつを矚り殺しにしてやれ!!」

そういうと今度は仲間が出てきて、5人になった。魔法を放つてくる。

だが防御力が底上げされてる俺には当然効かない。だか中々ウザい。

(だんだんイライラしてきたな…。ここらで終わらせよう。ねえ、付き従ウ者従者。あいつらを黙らせるいい方法はない?)

『解。自らのオーラを相手に放出すれば、威圧することができます。』
(おお、威圧か。じゃあ、やってみる。)

俺は自分のオーラを相手に放出する。そのオーラは金色でわずかに漏れるオーラだけでも巨大な存在感を放つ。俺のオーラにあてられた冒険者たちは目をひん剥いて、泡をふき、失禁して気絶する。

『スキル「威圧」を獲得しました。』

何やら新しいスキルが手に入ったようだ。だがそれよりも…

「やば…。やりすぎた。」

気がつくとも目の前の冒険者全員が気絶していた。

4話 事情聴取と鍛冶職人

「で？言い訳を聞こうか？」

さて、今の俺たちの状況を分かりやすく言おう。現在俺たちは…
牢屋にぶち込まれています。

どうしてこんなことになってるのかというと、

俺が柄の悪い冒険者たちを撃退したときに衛兵たちがきて、事情を詳しく聞くために現在、事情聴取中なのだ。ちなみに今俺とゴブタは縄で縛られて、リムルは牢屋をすり抜けられるので樽の中。

ということであれは、衛兵の人に何があつたかを説明しているのだ。

「とまあ、こんな感じですよ。向こうから絡んできたので、俺たちはただ自分の身を守っただけです。それに俺は手をあげたりしてません。」

「うーん…まあ見ていた者の証言と概ね一致するが…」

そんなとき…

「隊長、大変だ！鉱山でデカイ事故が起きた！」

衛兵の人が突然部屋に飛び込んできた。

「なんでもアーマーサウルスが出たとかで…」

「なんだと!？」

アーマーサウルス？魔物の名前か？

「町に出てくる前に仕留めんと…っ」

「いや、そっちは大丈夫。すでに巡回の奴らが討伐に向かっています。ただ…魔鉱石の採取のため奥まで潜っていた鉱山夫がひどい怪我を負ったようで…」

「なにっ!?ガラムたちが!？」

話を聞いていると、どうやら鉱山に潜っていた人たちが大怪我したらしい。

「俺たち空気のな。」

「だね。」

「っすね。」

俺たちは完全に放ったらかしにされてる。

「戦争の準備だから回復薬の類は品薄だ。このままじゃ」

「馬鹿言うな！あいつらがそう簡単にくたばってたまるか！」

どうやらその人たちの怪我を治そうにも、回復薬があまりないようだ。このままでは危ないという。

「ねえリムル。何とかできないかな？」

「うくん…。あ！そうだ。俺の胃袋の中にある回復薬を分けて、その恩を売って釈放してもらおう。」

「え？回復薬持ってるの？」

「ああ。俺が転生した洞窟の中の薬草食いまくって、回復薬はいっぱいあるんだ。」

「そうなんだ。ならそれをあげるってことね。」

「そういうこと。」

早速リムルは樽の中から出て、衛兵さんに話しかける。

「なあ、旦那旦那。」

「ん？つて、おい！何勝手に出てるんだ！」

「まあまあ、それどころじゃないんでしょう？これ必要なんじゃないですかね？」

俺は回復薬で満たされた樽をゴブタと衛兵さんの前まで運ぶ。

「これは？」

「回復薬ですよ。飲んでよし！かけてよし！の優れもの！」

リムルのユニークスキルの大賢者が作った貴重なヒポクテ草という貴重な薬草を使った回復薬らしい。これが有れば、大怪我也治せるという。

「その怪我人たちを治したいんですよね？他に打つ手がないなら俺たちの言葉を信じてみませんか？」

(さて、俺たちを信じてくれるか…)

衛兵さんは少しの間考えると、

「お前ら、ここから出るなよ！おい！行くぞ！」

「隊長、マジすか！あれ、魔物でしょ?!」

「うるせえ！行くぞ！」

どうやらとりあえずは信じてくれたようだ。

待つてる間、俺はどこまでライドウオッチを作れるかを試していた。

　どうやら平成の主役ライダーの通常フォーム、中間フォーム、最終フォーム、サブライダーのライドウオッチは問題なく作れるようだ。

　だが、ジオウⅡのライドウオッチやトリニティ、グランドジオウライドウオッチは作れないようだ。

（いまの俺では力不足ということかな？）

『解。現在の我が王の作れるライドウオッチは平成主役ライダーの通常、中間、最終フォーム、サブライダーのライドウオッチが限界です。これ以上のものを作るとなると、更なるパワーアップが必要かと。』
（なるほど。）

　なら、これからも強くなるために頑張るしかないか。

（ねえ、ライドウオッチの力つてさ、応用もできるんだよね？ならさ、ジーニアスフォームの浄化の力で毒とか浄化できたりするの？）

『解。毒の解析ができれば如何なる毒でも浄化が可能です。また、ゴーストライドウオッチの力で相手の魂を抽出して眼魂にすることや、極アームズの力で植物の成長を早めることもできます。』
（おお！結構いろんなことができるんだ！こりや便利だ！）

　なるほど。普段の生活でも使い勝手がいいな。色々使い道があるぞ。

　そして1時間後：

　衛兵さんが3人の男性を連れて戻ってきた。

「助かった！ありがとう!!」

　衛兵さんが頭を下げる。衛兵さんの後ろの男性3人が話し始める。

「あんたらがくれた薬じゃなきゃ死んでた！ありがとうよ！」

（うんうん）

「今でも信じられんが、千切れかけてた腕が治ったんだよ！」

（良かったなあ）

「コクコク」

(いや、何か言えよ！)

みんなお礼を言ってくれるが、最後の人は頷くだけで何も喋らない。無口な人なのかな…？

まあとりあえず、みんな無事で良かったよ。

「いやホント助かったよ。あんなすごい薬は初めて見たぜ。俺にできることなら何でも言ってくれ。」

どうやら衛兵さん…カイドウさんは俺たちを信用してくれたようだ。

翌日…

俺たちはカイドウの案内で鍛冶職人の所へ行くことになった。

「にしても、すごいな。」

「うん。すごいね。」

「っすね。」

ゴブリン村よりも遙かに文明が進んでる。中でも武器や防具がすごい。とても素人では作れないような業物ばかりだ。ふと、鍛冶屋に目を向けると一本の剣に目がいく。

「ん？あの剣、薄ら光ってる。」

「本当だな。」

綺麗だなあ。素人の俺でも分かる。きっと凄い職人が作ったんだろうな。

「ああ、あれだよ。これから会いに行く鍛冶職人の作った剣は。」

へえ、あの剣を作った人か。どんな人なんだろう？

俺たちの頼みをちゃんと聞いてくれればいいんだけど。